

木瓜^{ボケ}の花が咲いた！

中村 龍介

今年は何年にもなく春の訪れが遅い。毎年、お彼岸には花を咲かせるペランダの鉢植えもかたくなにツボミを閉じたままであった。その中でも私の最大の関心はボケの木で、毎日のように固いツボミを観察していた。

七年前の春先、私は身体の不自由な妻を車椅子に乗せて、近くの商店街を散歩していた。とある花屋の店先で妻が何か叫んだ。色鮮やかに並べられた紅梅、白梅の鉢植えの奥で、ひっそりと咲いている小さな花を指差している。

ホンの十センチほどの木瓜の木だが、たくさんのツボミをつけ、開花したものが数輪ある。梅とは異なる淡いピンクの花弁から、妻は大好きな桜を連想したようだ。

早速買い求めてリビングの陽の当たるテーブルに飾った。部屋の暖房が効いたのか、小さな木は直ぐに満開。毎朝水をやるのが妻の楽しみとなった。

が、数日後、妻は脳出血の再発から入院してしまい、五年余りの闘病の末に他界。再びその花を見ることはなかった。

リビングに残された鉢植えはどんどん成長し、毎春可憐なピンクの花を咲かせた。

三年前、多摩川べりのマンションに転居した際、大きめの鉢に植え替えて、陽当たりの良いペランダに置いた。

ところが、その翌年マンションの大補修があり、十点ほどの鉢植えをすべてペランダから撤去することになった。置き場所に窮して、止む無く納戸に押し込めた。

悲しいかな、陽の当たらない納戸の中で植木は次々に枯れ始めた。木瓜も例外ではなかった。この木だけは元気になつてほしいと、細い枝を大胆に切り落としてリビングの窓際に移した。とはいえ、ビル全体がメッシュと呼ばれる薄い布でスッポリと覆われていて、殆ど陽光はない。半ば諦めていた。

ある日、枯れ枝の先に緑色のゴミのような小さな芽らしきものがあるのに気がついた。ひよつとすると生き返るかもしれない。微かな希望が湧いてきた。



↓ 2年後



数日後、小さなゴミは双葉へと育った。素直に嬉しかった。せつせと手入れに励んだ。やがて、次々と葉が出て、ビルの補修が終わった頃には木瓜は完全に復活した。

しかし、次の年の春を迎えても花は咲かなかった。暖かな陽を受けたベランダで、木瓜は青々と若葉を茂らせていた。焦ることはない。来年には咲くかもしれない。気長に待つことにした。

年が明けて三月、たくさんのツボミをつけた。開花が待ち遠しかった。彼岸の中日は初夏のような暖かさ。固く閉じていたツボミにそっと指で触れてみた。少し膨らんだツボミの先端には微かにピンクの花弁が覗いていた。

四月四日は妻の祥月命日。在京の親戚が集まって三回忌の法要をもった。昼食の後、満開の桜を鑑賞しようと、全員で多摩川堤を散策。生憎の曇り空だったが、日曜日とあって、たくさんレジャー・シートが敷かれ、大勢の花見客が桜の下で弁当を拡げていた。

家に戻り、私は真つ先にベランダに出てみた。咲いた！

一本の枝に、他のツボミに先駆けて、一輪のピンクの花が誇らしげに開いている。

妻の死に合わせるかのように生死をさまよった木瓜だが、二年後、妻の命日に花を咲かせたのだ。ほんの一輪だけだが、満開の桜よりもずっとずっと美しくかった。

〔二〇一〇年四月記 原稿用紙約四枚 課題「商店、春」〕